

小学部 分科会まとめ

◎ 協議

○ 参加者A

- ・ 実態把握が難しい。
- ・ 今年度から、自立活動抽出指導担当になった。誕生寺支援学校には、自立活動計画・自立活動課題表はなく、K J法による実態把握を行っていない。来年度に向けては、申し送り表のようなものを作成しないと行けないと思う。

Q 1

K J法は、児童全員していますか？ それとも一部ですか？

Q 2

自立活動課題表と自立活動計画表のよかった所と改善点。

Q 3

ペクスの指導をするにあたっては、絵カードを見分けることができにくい。好きな物をいろいろなカードの中からとり出すことはできる。好きな物同士から選んだり、絵カードで自分の気持ちを表出するところで止まっている。

A 1

全員行っている。

A 2

自立活動計画表に実態が入っていないのが課題である。

健康の森学園支援学校では、長期目標は3年、短期目標は1年としている。自立活動計画の長期目標は1年、短期目標は半年を考えている。この辺りの整合性を図らないといけない。

A 3

自閉症ではないのに、ペクスをする意味は？

昨年度から、担任がペクスに取り組み始めた。障害種は異なるが、段階的に取り組みやすく、知的障害の児童にも活用できると判断した。状況によっては2語文程度は表現することができるようになっていた。今年度、担任が替わり、環境が変わったのでフェーズ2に落としている。

○ 参加者B

Q 1

実態把握のところでは、シンボルの入力・出力が有効ととらえているのに、文字や構音を優先したわけは？

Q 2

実態把握における順位は、数字の通りなのか。

A 1

シンボルは入りやすい。しかし、担任としては言葉を使って話したいという意欲が高いことを優先した。

A 2

文字を優先したわけは、文字が分かると将来の生活が豊かになるのではないかと考えた。特に自分の名前が分かるということ、作業なので文字が分かると可能性が広がる。シンボルだけやっていったのでは、幅が広がりにくい。小学部段階としては、可能性を広げるために文字の獲得に取り組むことにした。

◎ 指導助言

○ 難波指導主事（岡山県教育庁特別支援教育課）

- ・ 丁寧に子供を見ている。
- ・ コミュニケーションは、文字や構音だけではない。伝えたいという部分が大切である。やり取りをする部分を大切にしてほしい。
- ・ コミュニケーションをとりたいという意欲の部分を高めていきたい。
- ・ ただ、自立活動課題表を見て、コミュニケーションの部分に限定しているわけではないことが分かる。6領域は複雑に絡み合っているので、一部分だけを取り上げることはできない。
- ・ ビデオの中でフェーズ2の段階に取り組んでいるとき、支援者の方が待ちきれない。ペクスも、担任・支援者の関係性の中でできている。今回、あえてフェーズを下げて取り組んでいるのがよかった。

中学部 分科会まとめ

◎ 質疑

○ 参加者A

Q 1

離席が目立つ、興味あることにのみ取り組む、友達を急き立てる等、同じような実態の生徒を担当している。

文字カード以外の手立てはあるか？

A 1

責任を持って取り組んだり、やり遂げたりする態度を育てるために、様々な活動に役割を分担して取り組むようにしている。また、対象生徒Aは、「やらないのならB君に頼もうかな」と言われると、「それなら自分がやる」と発言することから、Aの気持ちをくすぐるような働き掛けをすることもある。

○ 参加者B

Q 1

課題別学習のプログラムを自分で決めているということだが、手立ては、どうしているか。

A 1

生徒Aの特長は、興味を持つと熱心に取り組むことである。そこで、まずは、好きなアニメやキャラクターを使った教材を作り、Aの関心を高めるようにした。次に、同様の教材を複数作成し、Aの意思で取り組む順番を決めるようにした。この方法で、一定時間、机についての学習が可能になった。

○ 参加者C

Q 1

カード(指示・手順等)やタイマーの定着を図るための手立ては？

A 1

目の前のカードが表している内容は何か？アラーム音の意味は？等、活動の様々な場面で用いることにより、それぞれの支援グッズの意味づけを図るようにしている。

○ 参加者D

Q 1

苦手なことにも取り組むことができるようになるために大切なことは？

A 1

本人の努力を認め、しっかり称賛し、誉めて伸ばすこと(本人が喜ぶ方法で称賛すること)を大切にしている。そのためには、誉めるための場면을意図的に設定することもある。

高等部 分科会まとめ

◎ 質疑

○ 参加者 A

Q 1

企業内作業学習では、お店の方はどのように関わるのか？

A 1

実習ではない。授業なので、指導者は教員である。

○ 参加者 B

Q 1

目標設定で、授業の目標と自立の目標の関連、すみ分けはどのように？

A 1

メインは作業学習の目標。(作業をする力をつける)そして、その生徒に視点をあて、自立の目標を考える。

○ 参加者 C

Q 1

生徒が変容していく中で、目標や活動内容の設定はどうしているのか？

A 1

今までは学部や学年において共通の課題として取り組めていなかった部分があった。今年度から専任教師による指導や指導計画の共通理解を行っている。

◎ 協議

「児童生徒の実態把握と課題の決定について、検査だけではなく、児童生徒の実態把握をどのように行い、課題を見つけ出していくのが効果的か。また、それを教職員で共有していくにはどうしたらよいか。」

○ 本校職員

本校生徒は一般の中学校の学校集団の中では目立たない。→小さいときからいろいろな集団を経験させる(仕組む)ことで、いろいろな姿が見えてくる。

→実態把握につなげて、課題の設定をしていく。

○ 参加者 D

自分を出せずにきた生徒もいる。高等部に来て、今までやれなかったことをやる生徒もいる。いろいろな人たちとの間で自分の姿を出す生徒もいる。(この先生の前では… 違う先生の前では…)

実態は無数にある。一つではない。

→意見交換(エピソードの記録)

書面に時間をかけない。文字よりも言葉で…が有効

○ 参加者 E

検査は何をしているのか

→ SM、LDT-R(太田ステージ)

高等部なので、卒業後に困らないように指導していく。

自立活動指導力向上事業全体会記録

○指導助言(特別支援教育課 難波映二指導主事)

- ・本年、5校にお願いした事業。トップバッターとしてプレッシャーがあったと思う。まず、自立活動について整理してみたい。指導要領を読むと、自立活動の必要性が載っている。「人間としての調和のとれた育成をめざす」がある。
- ・自立活動：知的障害では、分かりにくい。身体障害は、分かりやすい。この子にとっての自立活動って何をしたら？と反省することもある。自立活動の捉え方が曖昧になりやすく、まだまだ荒削りではあるが各校独自の様式はある。様式に当てはめることで、子供の実態がはっきりしてくる。実態を受けてどういう目標を立てて支援していくかを見極め、年度が替わる際にきちんと引き継ぐことが必要になる。
- ・自立活動の視点をもって支援する、自立活動としての評価をもつことが大切である。自立活動をやっているという意識を教員が持てるようにする。
- ・特別支援教育は、社会参加に向かっている学習なので、どんな学習でも自立活動は入ってくる。この子にどんな力をつけさせたいか、という視点をはっきりと持つことが大切である。
- ・実態把握(教育的視点に立って考える)→1人の先生だけでなく周りの先生にも話して共存することが必要である。「この実態に対して、こんな事したらどうだろうか…」などの話を担任間で行うことが大切である。
- ・健康の森は、自立活動の取り組みを新たに積み上げてきた。他校へ行ったときにさらに広がるだろう。更なる特別支援教育の積み上げに努力してほしい。